

# 槐

かい

岡井省二創刊

令和元年10月号

令和元年十月一日発行 第二十九卷第十号 通巻第三四〇号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

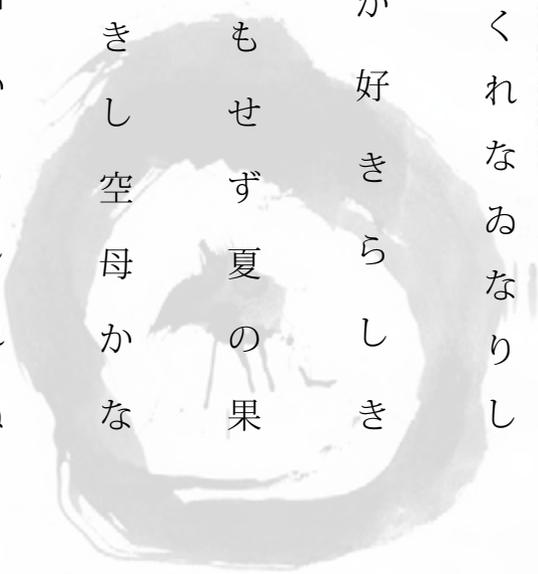


# 夏館

高橋将夫

白  
シ  
ャ  
ツ  
で  
更  
つ  
直  
ぐ  
述  
べ  
る  
意  
見  
か  
な  
  
兜  
虫  
そ  
の  
雄  
姿  
も  
て  
舐  
め  
る  
蜜  
  
檜  
扇  
と  
天  
狗  
の  
団  
扇  
交  
換  
す  
  
蛍  
火  
は  
男  
の  
胸  
を  
焦  
す  
な  
り

フ  
ア  
イ  
ア  
ー  
ス  
ト  
ー  
ム  
夏  
山  
に  
歡  
喜  
天  
う  
つ  
か  
り  
も  
す  
つ  
か  
り  
も  
こ  
の  
暑  
さ  
か  
な  
祇  
園  
会  
の  
闇  
は  
か  
ら  
く  
れ  
な  
み  
な  
り  
し  
雨  
の  
神  
祇  
園  
祭  
が  
好  
き  
ら  
し  
き  
夏  
ら  
し  
き  
こ  
と  
何  
も  
せ  
ず  
夏  
の  
果  
夕  
立  
が  
洗  
つ  
て  
ゆ  
き  
し  
空  
母  
か  
な  
夏  
館  
謀  
議  
の  
途  
中  
か  
も  
し  
れ  
ぬ



# 槐安集

加藤みき

朝ぐもり海山みんなにつこりと  
今年また四条河原の夕涼み  
玫瑰の棘これでもかこれでもか  
少年よ外に出て歩け夏の海  
百合の花波の泡立つ日なりけり

中島陽華

芝蘭かなやをら硯の蓋の上  
補陀落や熊野の虹を同行に  
時の日の右手でいらふピラミッド  
約束の氷小豆と能役者  
まなうらや山辺の大人うしとほうたると

竹内悦子

くちなしの花や御陵に上皇后  
石手寺に母子のこゑや立葵  
焼酎の名は二階堂縄暖簾  
土用丑若き男の力こぶ  
蛇の衣財布に昭和の匂ひかな

雨村敏子

夏越の風うけさやさやと人を訪ふ  
夏草に原始の匂ひありにけり  
鹿の子のはや夏鹿の眼を持ちぬ  
坪庭に月差して来し一夜鮎  
まひまひにひと日の歩み星の夜



本多俊子

水中花老いること許されぬとは  
昼顔にしんしんと射す宇宙かな  
ふわふわと水母の下を水母かな  
星涼し見えざる雲の流れけり  
峰雲や鬼とも御仏ともみえ

近藤喜子

一切の音封じたる蟬時雨  
いつの日か夢の繊維に蜘蛛の糸  
日ごとに海の深くなる晩夏光  
浜木綿の暮色たたへし波の音  
星々の歌ふがごとし夜の秋

瀬川公馨

憎体な口をききをる梅雨茸  
物売りの口舌をきく夏祓  
一尺はあらうかお化けズッキーニ  
金銀のタラブックスの蛇の森  
梅雨晴間ジャンクメールの多かりき

柳川晋

人工の風新参の風鈴屋  
LFDの誘ひに乗らぬ夏の虫  
蟬時雨の向かうに言ひ出せない言葉  
六角堂の闇うらがへす噴井かな  
宇宙から見ても天神祭かな

熊川 暁子

見るからに風のこまかくなる網戸  
踏みごたへなき此の世と思ふ大蚊ががんぼよ  
河骨のことん削る骨身かな  
僧籍を持つ禅寺のひきがへる  
今生は夕焼の中の一粒子

江島 照美

騒雨来てわたしの匂ひ消されけり  
じつと抱く紅き思ひの夏の月  
兜虫弄ばれて捨てられて  
風死して蠢くものなき身体  
はじけたいそんな思ひの鳳仙花

寺田 すぐ江

新らしき朝の来てゐる巴厘祭  
遠き日を語る遠き目走馬灯  
まだ生きるつもりよ螢追ひにけり  
子午線を行つたり来たり蝸牛  
暗雲の遠ざかりゆく泥鰌鍋

岩下 芳子

明け方の眼貫く稲光  
子を咬んで次次咬んで祭獅子  
一陣の風いかづちの立ち上がる  
ででむしや城の石垣舐め廻す  
虹の根を今飛び立たむ国際線

有松洋子

子は不思議炎天が好き雨が好き  
顔に生れたての風白扇子  
竹林に入りて涼しき声となる  
夕雲を分けてもらひし合歡の花  
殻に夢詰めまひまひの乾び無し

岩月優美子

人生の波サーフィンのごと乗りぬ  
雨つづき心に黴の生えさうな  
苛立ちを隠す扇はたをやかに  
生意気な言葉ときどき青林檎  
お花畠ハイジの声の聞こえ来し

近藤紀子

むらさきの朝顔似合ふ令和かな  
約束を違へしままの青葉木菟  
夏霧の晴れて茅葺き屋根見えし  
ジビ工料理に夏の女子会盛り上る  
暗きより昏きに誘ふ螢の燈

竹中一花

あらじんの壺を飛び出す夕立雲  
出世絵馬鳴つてをりけりはたた神  
田に写る山に入りし濁り鮎  
鹿の子の眠りの中に青き風  
筆太の屋号ゆらゆら麻暖簾

前田美恵子

日傘はや遺品となりぬ我が手元  
灯明の焰短く早星  
三界を見はるかしたる登山小屋  
何事も他言は無用大暑かな  
愛猫の骨壺軽し梅雨明くる

中田禎子

富士壺の乾く船底夏の雲  
招かるる補陀落渡海夏鯨  
六月や天満宮の花嫁さん  
縁台に抱へて来る古酒の壺  
夏の夜の百物語ピエロの目

吉田順子

かむなびの風に眼を閉じ袋角  
空蟬の軽きが朝の風つかむ  
小粋なり小雨に光る岩躑躅  
潮騒をまぢかにしたる濃紫陽花  
大いなる夜の山影岩魚かな



# 槐市集

中 貞 子

水無月の宇治橋乾く白さかな  
大御神の姿なりしか錦鯉  
御手洗の涼気ありけり五十鈴川  
青葉 風 奇 岩 怪 岩 神 宿 す  
かなぶんの清風残し去りにける

中 島 昌 子

風にのる風より軽き糸蜻蛉  
居住まひを正してゐたる青簾  
万緑へロープウエーの吞まれゆく  
田にゐると母の文字あり蠅入らず  
またあした固き約束茄子の花

中 西 厚 子

古書の匂ひ立ち込めてをる大暑かな  
夏の昼白い帽子の似合ふ女ひと  
木下闇出口の消へる小さき家  
夏の月影のあたりに目を凝らす  
烏鳴く碁を打つてをる夏の夜

橋 本 順 子

天界へ一直線に夏雲雀  
食パンの切り口ましろ梅雨の朝  
しんとして人も屋敷も娑羅の花  
百合の香の漂うてをる洞の中  
見つめをれば返しくるもの泉かな



平野多聞

高僧の喝にふれたき羽抜鶏  
黄昏の似合ふ男や著莪の花  
アナログの人間でよし胡瓜喰む  
真実盛る俳句は皿だよ健吉忌  
G20大阪サミット  
城壁に主顔してがまがへる

藤田美耶子

カクテルはブルーはるかに揚花火  
乳母車を列に加へて山車行けり  
水鏡に姿競へり燕子花  
迷ひなどどこにも見へず緋のダリア  
車椅子に慣れゆく母や梅雨晴間

三浦純子

蟬の声挨拶交す合唱団  
沙羅の花芝に散り敷く念仏寺  
冷房の温度上げ下げ夫を立て  
片付けて涼しき部屋となりにけり  
七夕やゆるる短冊願ひ込め

三木亨

落ちてゆく男滝一瞬吾を見し  
あでやかに手許をかはす夏の蝶  
いかにせむ燃ゆる赤なる病葉を  
夜の秋をんなに残る獣臭  
髪洗ひ女芸人ひもの許

安野真澄

諸々の彩染めし過去夏落葉  
真昼間の炎天の身の重きかな  
朝の日の光と影や夏木立  
蟬時雨起きろ起きろと急かさるる  
助けたり助けられたり冷奴

柳橋繁子

長雨や向日葵高く笑さきにける  
結願の大師の像や蟬しぐれ  
真桑瓜産土神の初生りを  
先達の声高らかに夏木立  
夕暮の巻き戻したる簾かな

# 槐集

## 高橋将夫選

鮎焼や見せる形の化粧塩 大阪 平野 多聞

さみだるる目を凝らしても見えぬ明日

雲の峰大志崩れてしまひけり

光るものみなたましひか天の川

どん底で見上ぐる天や蟻地獄

生まれ来てばんざいする子雲の峰

見えぬもの見えてくるなり蛍の夜

泰山木大人のごと花ひらく

夏薊記憶の襞にとげ残す

濡れそぼつ半夏生草の白冴えり

心中の侘戯れいやす梅雨晴間

向日葵や不屈の精神我もまた

夏扇をあふぎて夜を近づける

降る雹の鬼の嘘の一雫

平和とは井戸に西瓜のある暮し

藤田美耶子

枚方 高野 昌代

思ひ出と掬ふイチゴのかき氷 守口 三木 亨

串カツがビールに漬かる太鼓腹

饅頭の歯型が笑ふ涼み台

ニュートンの知らぬ所で落し文

扇風機わかれ話に首を振る

沙翁見る夏の夜の夢 UFO 芦屋 田中 信行

時空超えゲバラに捧ぐ紅き薔薇

生き証人黙して逝けり沖繩忌

内憂も外患もあり巴里祭

七夕や暮情の都市まちのシュプレヒコール

眠りより覚める不思議よ梅雨ざんざ 竹原 久保 夢女

ダリア大輪ちよつと小意気に帽子かな

此処ぞとは何処ぞと問へば合飲の花

釣り上げしものの得体や七月来

この甘さ許し難しと西瓜食ふ

# 銀河往来

## ◆槐集観照

雲の峰 大志崩れてしまひけり 平野 多聞

〈雲の峰幾つ崩れて月の山 芭蕉〉は月山の雲の峰が崩れる景。崩れる雲の峰に大志がはかなくも崩れる様が重なる。

〈鮎焼や見せる形の化粧塩〉、〈さみだるる目を凝らしても見えぬ明日〉、〈光るものみなたましひか天の川〉、〈どん底で見上ぐる天や蟻地獄〉、秀句が揃っている。どの句も簡明で、敢えて解説するまでもなからう。まぎれもなく本質に迫る精神の風景。それにしても、化粧塩とはなんと美しい響きだ。

生まれ来てばんざいする子雲の峰 藤田美耶子

縮こまって生まれた赤子がやがて手足をのばそうとする。そんな様子を万歳すると捉えた。この句の雲の峰は前掲の崩れる雲の峰とは対照的に、これからの大きな成長の象徴。

〈泰山木大人のごと花ひらく〉は泰山木の本質に、〈夏薊記憶の髪にとげ残す〉は夏薊の本質に迫っている。

降る 雷の 鬼の 嘸の 一雫 高野 昌代

雷を鬼の嘸と捉えた発想に脱帽。

〈夏扇あふぎて夜を近づける〉は縁側で涼む夏の夕暮れの情景を巧みに表現している。

〈平和とは井戸に西瓜のある暮し〉に平和とは何かを改めて考えさせられる。

〈心中の佯戯れいやす梅雨晴間〉と〈向日葵や不屈の精神我もまた〉はそれぞれ梅雨の晴間と向日葵の季語の本質を上手に生かしている。

扇風機 わかれ話に首を振る 三木 亨

別れ話の横で首振りの扇風機が回っている景。まるで扇風機が首を振って別れることに反対しているようでユーモラス。

〈思ひ出と掬ふイチゴのかき氷〉では思い出を掬い、〈饅頭の歯形が笑ふ涼み台〉では涼みながら饅頭を食べて、その歯形が笑う。どちらも着眼が面白い。

沙翁 見る夏の夜の夢 UFO 田中 信行

沙翁（さおう）はシェークスピア。沙翁とUFOのミスマッチに脱帽。そういえばシェークスピアの喜劇「真夏の夜の夢」のどこかに出ていたような気がしないでもない。

〈時空超えゲバラに捧ぐ紅き薔薇〉と〈生き証人黙して遊けり沖繩恋〉と〈内憂も外患もあり巴里祭〉の句、いずれも長く報道関係に携わってきた作者らしい作品。

眠りより覚める不思議よ梅雨ざんざ 久保 夢女

眠りは覚めて当たり前のようにだが、どうして目覚めるのかと聞かれたら答えに窮する。もし覚めない時もあるとしたら、人は誰も怖くて眠れない。ちなみに、睡眠中は危険な音は聞こえ、安全な音は聞こえないように脳が調節しているそうだ。

夏に 居り 夏に 愛され 夏の人 中西 厚子

夏をこよなく愛し愛され、今まさにその真つ只中に居る人。どんな人だろうか。夏のリフレインが想像力をかきたてる。

〈静寂を録音しをる熱帯夜〉は「静寂を録音」が〈閑かさや岩に染み入る蟬の声 芭蕉〉のように本質に迫る。熱帯夜の暑さがひしひしと伝わってくる。〈以下略〉